博物館学雑誌第10巻第1号・第2号合併号（通巻12号）59～66ページ 1985年3月

博物館としての水族館が占める位置について
―二ツの博物館施設に関係して―

On the Situation of the Aquarium in the Museum.

辰　喜　　洸*
Takeshi　TATSUKI

著者は，これまでに二ツの博物館施設について，その計画から設計，建設，運営に直接関係してきた。

その一ツは，民間の経営する博物館相当施設であって，それは1962年，米国シアトルで開かれた第1回世界国立公園会議の決議に基ずく，故，田村剛博士（日本における国立公園創設の父）の提唱する海中公園思想を受けたもので，1965年から和歌山県の関与したものである。著者は，当時，県職員の立場から，県下における海中公園の基礎的学術調査に加わり，後に財団法人海中公園センターに出向，全国的な学術調査の中から，自然公園利用計画の一環として水族館施設をも含めて具体化を進め，吉野熊野国立公園串本海中公園候補地区にビジターセンター的役割を持つ施設を誘致し，民間企業がこれを引継ぐに当って身分を民間に転じ，観光，レジャー，レクリェーションを通して自然公園に関する教育啓蒙を計り，1971年には水族館（マリンパビリオン）を完成させて10年の歴史の内に一応の成果を見た。今一つは，1979年和歌山県が国際児童年を記念する事業として打出した，県立自然博物館であって，これに伴う建設協議会に専門的立場から民間人の身分で委員として参画し，積極的な構想を打出し，県当局の要望の強い水族館を中心とした原案を作成，これを基に実施計画が進められ，計画進行に伴って再び公務員の立場に返って，1982年開館の運びとなった。

いずれの計画の場合においても，立地，内容，施設そのものの建設について異論を聞くものであるが，著者は建設の目的に沿うべく，これらの運用を計ってきた。

又，両施設を運用する内に，博物館施設としての水族館が，観客，経営陣は勿論，一般社会通念上，その利用目的において他の博物館を高度の教養の場として厳粛に捕えながら，動物園，水族館施設においては単なるレジャー，レクリェーションの場として往々にして低い位置に考えられること，ややもすると水族館の歴史から興業的要素のみが浮き上る傾向すら伺われる。このことは県立自然博物館の名称に水族館を冠してないことから受ける印象の異りが学識者の中にもあるので，公民二つの立場からその目的に本質的な異りの無いことを両者の計画，運用を通して論じたい。

1.　博物館施設の建設

二ツの博物館について（紹介）

一、マリンパビリオン（博物館相当施設）

民営　株式会社串本海中公園センター

先にも述べたが，設立に際しては国立公園の利用補助施設として計画されたものである。計画当時の建設所在地は国立公園区域の外にあって，海中公園そのものも法制化を見ないまゝに，財団法人，海中公園センターが先行，具体化を計ったものである。（総合施設の運営を第3セクターで検討したが，後に厚生省の指導により民営

* たつきたけし
和歌山県立自然博物館

となる）。

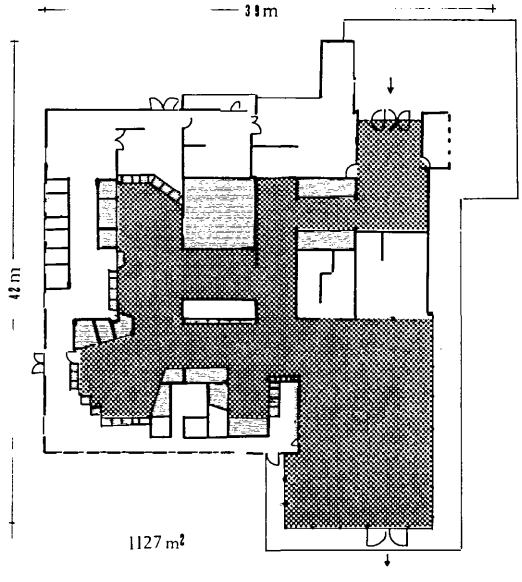
このことは，海中公園思想の普及，顕示を早急に進める必要性に有り，政治的要素をも多分に含まれた。しかし，施設の設置そのものについては，海中公園の価値と，法制化そのものの意義すら左右するものであり，設置の場所については慎重にならざるを得なかった。そこで，財団法人，海中公園センターでは，全国的にその適地調査を進め，海中の自然景観と，その利用の可能性を考え，故，田村博士のもとに関東で式根島，関西で串本の２ケ所を推薦，どちらも交通の便を見ると難は有ったが，陸続きである串本に事業を運ぶことを成功した（厚生省は，独自の事業化を持たない利用マスタープランを足摺岬を中心に計画を進めた）。

当時，紀伊半島そのものは，観光地，勝浦温泉，白浜温泉のイメージ強い所であって，その中間地串本は本州の最南端，潮の岬，橋杭岩の景色を売物にする通過地でしかなかった。施設の設置場所は国道には面してはいるが，交通拠点串本町（旧町内人口，１万人）から西へ６㎞を隔てた自然海岸で付近に数戸の民家を見る他，見るものの無い地域であったが，国道許容量から年間最高２５万人の利用を見込んで，占用海面を含む33,000 m^2 に駐車場（270台），レストハウス，グラスボード，海中展望塔，水族館を，又，関係施設として財団法人海中公園センター錆浦研究所を併設する総合施設として発足，1970年に吉野熊野国立公園串本海中公園地区の指定を受けた。

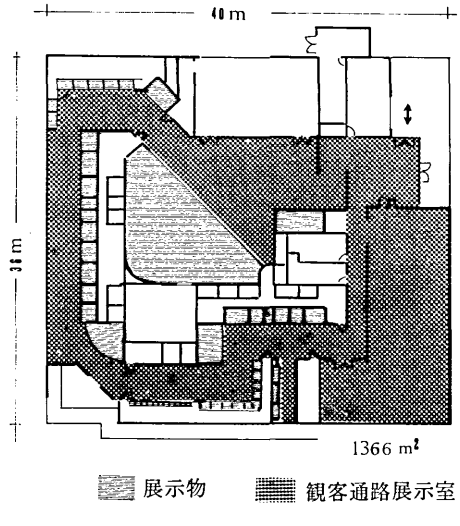
この様な経過の中で，水族館（関係者の多くは観光客を対象としながらも従来の観光水族館のイメージを単なる見せ物の場とし，そこから脱却の意をも含めて）の名称をマリンパビリオンとし，海中公園の利用者に対して，事前に海中景観を構成する生物群集を見せ，生物が構成する自然に対する理解を深める教育の場とする大きな使命をもたせた。その技術的な管理を前述の研究所が引受ける形で主要な職員を株式会社と併任させた。もちろん，ここでの展示生物は地域の海中景観を構成する生物，特に腔腸動物を中心にし，その他の無脊柱動物に重点が置かれ，魚類は従として一切のショー的要素を排し，展示を行った。その結果，石サンゴ類，腔腸動物の飼育に重きが置かれ，他に類を見ない特色あるものとなった。この展示については，当初，水族館経験者，学識者の中に，それが展示生物として観察，観覧に耐え得るものであるか，否か，又，飼育可能であるか疑問視する向きもあった。

しかし，田村博士と著者は，生物の持つ造形の面白さは見るに耐え得るものであるとし，水槽では種を展示して見せる事は勿論であるが，単なる種の展示ではなく，自然界における生物群集の一部分として表現し，海中公園のイメージから受ける美しい海をマリンパビリオンを通しで紹介し印象付ける配慮が計られた。

そのため，これまでタブー視されていた水槽への太陽



串本海中公園センター（マリンパビリオン）



第１図　和歌山県立自然博物館

光線の導入も積極的に取り入れ，水族館としての立地条件を生かした開放式水槽は，人工造形による工築物ではあるが，生物の生息状況を熟知した技術者自らのディスプレーにより，自然の息吹を感じさせ，大水槽を見る者の目には自然の海と見紛う工夫が加えられている。全体47槽の展示水槽を通して，自然観察の場，海中展望塔，グラスボート，或いは，自然探勝路シュノーケリングコースへとの興味を導くものである。

他に，博物館の関連施設としては，前述の研究所内に研究室は勿論，図書室，実験室，資料室，講義室，宿泊室をも備えている。1984年現在，フィールド活動に優れた8名の技術者（博物館で言う学芸担当者）が活動し，年数回の自然観察会（マリンスクール，シュノーケシング教室，その他）を行い，又，大学，研究所等との交流（臨海実験所的），調査研究の他，類似館に例の無い定期刊行物を発行する。

二、和歌山県立自然博物館

この博物館の建設は，国際児童年の記念事業として県当局が「子供はく物館」についてその建設構想を進めたことから始る。その趣旨は，子供達が，自然の姿に接し，学習する場としての博物館機能を有し。内容，方法，においても，子供達が親しみやすく学習できる教育，普及機能を中心とする施設である。

上記のことを踏まえて，1974年9月，県議会での建設承認，事務当局での建設準備室の設置と，県，地元海南市の行政，教職員，実務家からなる学識経験者による建設協議会の設置。同年10月第1回建設協議会により小委員会の設置，小委員会に対する建設基本構想の付託。矢継ぎ早に開かれた同委員会による3回の構想検討の後，中間報告が出された。同年11月には，第2回建設協議会により中間報告の承認がなされ，12月には早くも建設工事設計の運びという早いものであった。このことは第1回建設協議会において事務局から年度内着工の要望に答える形となった。その後数回の小委員会により展示内容の検討を行い，1980年3月第3回建設協議会で展示基本構想の承認を得た。

しかし，この時点において，具体的に博物館に収蔵，展示されるべき資料については，関係委員の所有する植物，貝類の標本のみであった。その後，小委員会は6名の専門委員を推薦して，展示構成に基ずく資料収集にあたった。又，1981年4月より建設準備室に専任の職員を置き，10月には展示の大半を占める水族部門の生物収集飼育職員5名を採用，事務職3名を含む12名で開設準備室が置かれ，1982年7月，和歌山県立自然博物館として開館する。

尚，この博物館の建設に関しては，当初，事務当局において一般的な自然博物館の概念の上に構想され，協議会で模索し，空間を埋める個々の展示物の上に組立つものであったが，幸い，建設協議会委員，井上統二副知事より水族館を中心とするものにしたい，の意見が出され，著者は，委員会段階において博物館の持つ明確な性格とイメージをシナリオ化する必要性を強調した。

それに基ずき，和歌山県の位置する紀伊半島，黒潮に育まれた豊かな自然を紹介することとし，青い海，緑の山，暖い日差しを表現することを基本に，それぞれの専門分野に展示構想が委ねられた。

展示構成は，生きた水族展示（いわゆる水族館部門）と，乾標本，ジオラマ展示をした展示室（一般概念上の博物館）に分けられた。

水族館部門は，黒潮の雄大さ，水星と言われる地球を表現するため水の迫力を導入部に置き，生きた生物の生態展示を中心に，県下500㎞の海岸線を地域，生息の場，分類，形態，利用と纏めた。

陸域では，紀伊半島の代表的な照葉樹林，那智山の原生林のジオラマ，そこから派生する自然景観と昆虫の分布，形態，多雨地帯紀伊半島の河川，池の生態，土壌を小展示する。又，和歌山県が，国内でも有数の貝類の生息地でもあることから，その展示を通して，地理的な位置と，貝とはどのようなものか，貝の特異性等を，種の展示でなく，テーマ展示の形式をとっている。

全体を通して内容的には，子供が，ごく自然に親しみをもつ様配慮し，自然教育の導入の場とする。

その他，博物館の施設として，研究室，講義室，資料収蔵施設を備える。学芸部門を担当する職員は10名，内5名は展示水族の飼育収集を中心に活動する。

年数回の野外観察会，講演会の他，特別展，印刷物を通しての教育普及活動が続けられる。

2. 博物館に対する観客の対応

上記の民営，公営両者の博物館施設は，規模，展示の内容において大きな差はなく，いずれも施設の名称に水族館と言う言葉を冠しない施設である。

しかし一般には，「ナーンダ水族館か」とか，「水族館の有る博物館は此処ですか」と若干ニュアンスの異る受けとめ方がされる。

ごく普通に，一般通念上の博物館と水族館の受け止め

られ方として，前者は閑静な建物に整然と並ぶ展示物，難い解説で教養を深める場的に，水族館は遊園地，観光地にあって遊びの序でに楽しむ場的利用がなされる。

展示の場において標本が並び，模型，ジオラマによる説明と，生きた生物の展示とが一般に与える心理がそうさせるのであろうか，マリンパビリオン，和歌山県立自然博物館においても，特に大型水槽においてその傾向が現われる。観客の歓声は，作者として一応の評価を受けたものと考える。

展示物のジオラマだけを取り上げて考える時，大型水槽その物も一種のジオラマと考える。最近多くの自然系いわゆる一般社会通念上の博物館に見られる原生林，原野等を模造したジオラマについては，一般観客の評価は如何様なものであろうか。多聞に漏れず和歌山県立自然博物館にも同様の開放型ジオラマを有するが，ここでは，その作品の出来，不出来に評価が集中する。先ずジオラマを構成する造形物が本物か否か，本物とすれば太陽光の無いことに不思議がり，手に取って確かめ良く出来てると造形の技術に感心する。しかし，それが何を模造したものか，までは追求しない様だ，まして原生林を構成する植生にまでは感心を寄せない。もしこの中に動く動物剝製でも入れようものなら，先はそれにだけに目が行くだろう。展示者側の意とする所は仲々受け止められないし，水族館の大水槽に見られる歓声もない様だ。ただ大水槽そのものを造形的に表現したジオラマと生物の組合わせとして見る時，観客は先ず歓声，又は感嘆を感情に現わし，ついで，展示生物の種，又は行動に強い興味を見せる。又，その他の展示物についても観客は動く物に興味を持ち，貝ガラ，昆虫標本，各種の模型が無数に集められ，解説とラベルは今日も明日も変ることなく，珍種，稀種を並べて，ああこれがと好事家を楽しませるにすぎないきらいがある。

大方の観客は純粋に，生物の展示に対して興味を示し，標本に対しては，持てる知識で対処する。としたなら前者はレジャー，レクリェーションの途に知らず知らずの内に知識を得，その中から後者への理解を深めるとも言える。博物館について，1980年5月29日，日本動物園水族館協会，通常総会において，明日動物園と水族館を取り上げ，栗林公園動物園長，香川美民氏は，博物館法において動物園，水族館の何たるかを求めて見ると，僅か1語が示されるのみで詳しい内容のない事を示し，唯，言える事は博物館法指向をとるならば，あらゆる活動の中の1項目として，レクリェーションをとらざるを得ないとしている。

又，上野動物園，浅倉園長談として，一般的に考えられることは，動物園，水族館は博物館的指向であっても楽しい場であってほしい。どう云う楽しさが，どんな方法によって生れてくるかは経営者の判断による。

そこで，何度も繰り返すことになるかも知れないが，一般大衆における博物館についての概念が，歴史，考古，民俗に強く，次いで総合，自然，理工ーー美術館に至っては博物館のイメージすらないのではないだろうか。又，植物園，動物園，水族館も同様，それぞれの呼称を用いて利用目的を異にし，博物館のイメージはない。又，観客は博物館の呼称についても良く対応する様にも思えるし，運営の側にも古い呼称からの脱却を試みる嫌いがある。科学博物館の中には，科学館と呼び，より先端技術を紹介するのは時代にマッチして良く判るが，観客は難しい呼称，言葉を求めているわけではない。それぞれの園館の持つ特色を館名に冠するのが一般に馴みやすいわけだが，最近の自然系の博物館には（自然）史を冠した名称を用い観客は一時戸惑う，自然の遺物の展示，古い博物館のイメージを一層強めている。当事者説明とは異り業界だけに通ずる言葉と受け止められ，一般には馴めない，そもそも自然そのものは過去から未来へと変遷するもので観念的哲学：「動かざるものは，厚地」の考えかたの上に立却するものではなく，自然は自然であって，その歴史をも含めて未来をも解明する科学と，それを展示して自然博物館と呼称するならば一般によく理解されるであろうし，あえて史を付すならば，全ての博物館は史を冠することになるだろう。

和歌山県立自然博物館の呼称についても，県民が馴みやすく，現に生きている生物から標本，過去の姿を通して未来を考える理念から著者は館の名称についても強調する。

3. 展示から受けるもの

展示の大要については，それぞれの館の持つ性格で異るストーリー，シナリオによって構成されるのが原則であろうが，個々の「物」を羅列して展示する場合も有りうる。

いずれにせよ観客に対して見せる，見てもらう事が重要で，見せ方，いわゆる展示の方法で観客の受けとめ方が異る。そこでは如何なる場合においても美的な工芸，芸術的センスが伴う，展示の直接的意味をもつ解説は，二の次となりうる事もしばしばある。

展示解説にあたっては，学芸担当者は，ある程度の専

問家，又は経験者で，ある意味において高い理想の基に観客に教育の高度化を計ろうとする。しかし，観客の側は展示物に興味を示すものの，中には専問家もいるだろうが，その多くは全くの素人である。

博物館の多くは，一般に，大衆に向け公開される施設で，博物館関係者に展示技術や高度な研究レベルを見せる場ではなく，専問家なれば，大学の研究室，標本室で充分であるはずだし，展示物の前で，好事家，同好者，専問家の蘊蓄を傾ける場でもない。

展示の内容は素人が見てわかる，理解のできるもの，つまり親しみの持てるものを中心に解説を加え，展示物全体に興味を湧かさせる必要がある。

又，一方では，展示物の中に目玉商品的考えを思考するものもあるが，展示の内容にクライマックスはあっても一展示物を目玉化するのは博物館の普及教育に問題を残すだろう。その意味で，パンダ，エリマキトカゲ，コアラ等に見られる社会的取扱いは，博物館にとって迷惑と考えざるを得ない，そうでなければ興業，見せ物のたぐいで，可愛いかった，面白かったの域で教育とは言い難い。

朝日新聞：昭和５９年１０月２９日，エリマキ君は今，コアラ人気に影薄れ，の記事に見る流行的現象に陥いる。いずれの展示物も園館の持つ全体的な展示を通して，全体評価の中で観客自身が，見出す展示，その補助解説が加える押付けでないものでありたい。

又，最近よく耳にする観客が参加する展示と言うのがあるが，本質から程遠い一見参加に見える参加も多い，物質過剰からくる，与える，押付ける，貰うの反動は，ボタンを押すだけで参加したことにしてしまう。自然系の博物館では昆虫が，いくつかの体節からなっている事を見い出し，魚の餌の捕えかたの異りを目前に見て観客自身が考え知る事こそ本当の参加で，その方法をいかに導き出すかが学芸担当者の教育普及の手腕と言えよう。

4. 博物館で何を教育するか。

従来の自然系の博物館における教育普及活動は，それぞれの博物館の目的に応じ，体系的になされて来た。

しかし，最近は時代の趨勢の中で，博物館，学校教育においても，自然を扱う場合，応々にして環境保全，自然保護が強く表に出てくる。串本海中公園センター，マリンパビリオンに於ける自然保護教育は，館創設の目的からして自然保護に重点が置かれて然る可き施設である。しかし，多くの自然系博物館は自然保護センターではない。客観的に，自然と，その現象を捉えて行く教育に心がけ，学芸担当者の思想に左右されるべきではない。

本来の自然界と人間社会との係りを知り，人間も自然界の中にあって，人間が見た自然ではなく，自然の中の人間が見つめられる科学的教養を得る場でありたい。

又，博物館は，大衆の身近な処にあって，余暇の利用，健全なレクリェーションを通して知らず知らずの内に教養を身に付ける場で押付け教育の場ではない。

しかし，大衆が博物館の存在を知り利用するに当っては，その切っ掛けは重要である。広報，報道を抜きにする訳には行かない。博物館を作った，出来た。何が有るだろう，どんな所だろう。大衆の興味を呼び起し，余暇の利用として現われる。個人，家族，友人との学習，レジャー，レクリェーション。学校，一般の団体による学習，レジャー，レクリェーション，この場合は，旅行業者の介在も有るだろう。色々な利用の中で，家族的利用のしめる割合を抜き考える事はできない，次いで団体の利用となる。個人的な趣味，専問家等の利用は極く少数に限られる。

又，博物館は健全なレジャー，レクリェーション（＝健全な観光の場ともなる〔日本人的通念の観光と観光に対する世界観は異る。〕

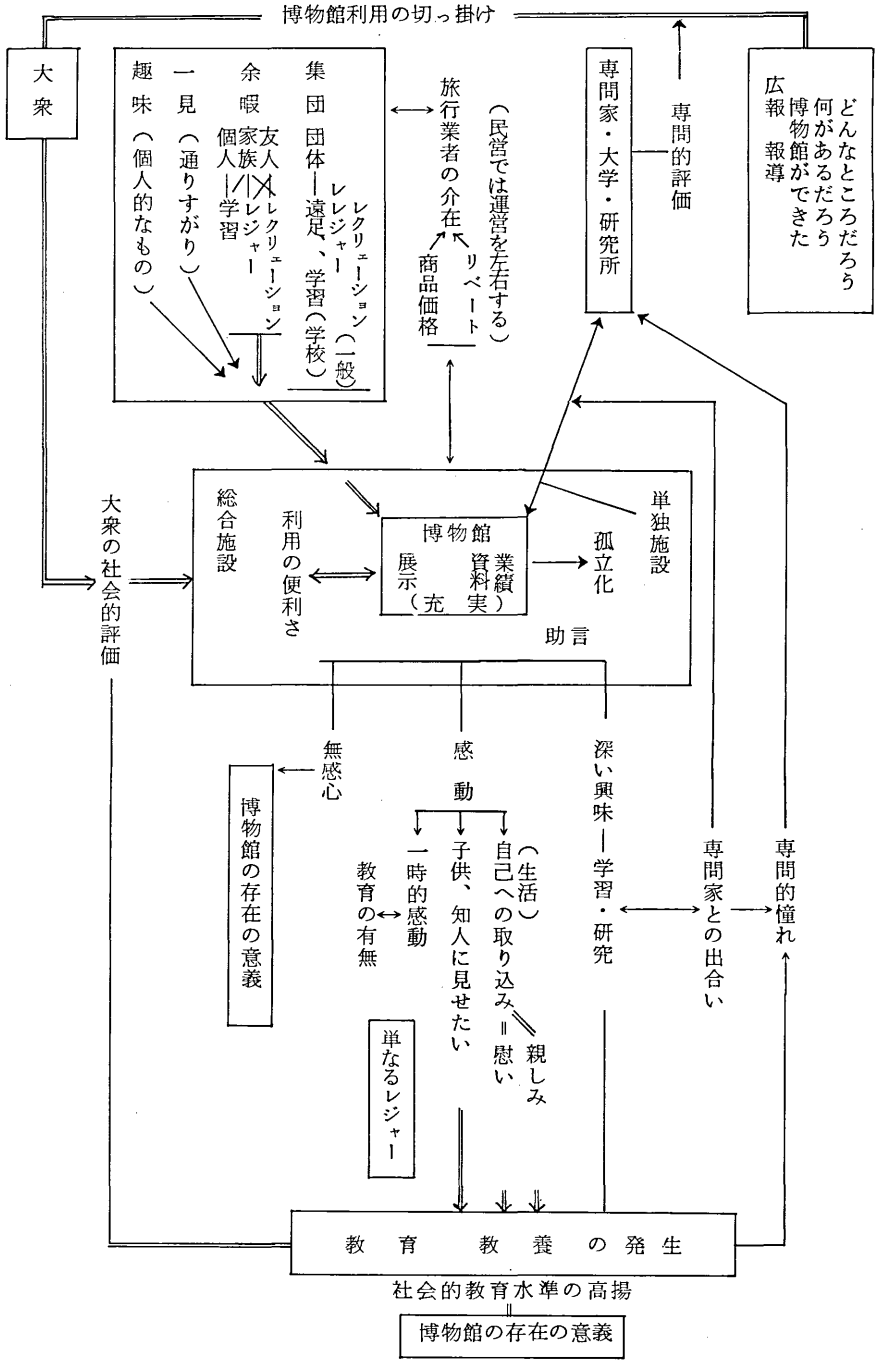
昭和４４年内閣総理大臣官房，観光政策審議会答申による観光の定義は，「観光とは，自己の自由時間（＝余暇）の中で，鑑賞，知識，体験，活動，休養，参加，精神の鼓舞等生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為（＝レクリェーション）のうち，日常生活圏を離れて異った自然，文化等の環境のもとで行おうとする一連の行動をいう」。）

博物館の利用者は館に対して何らかの感情を示す。感動，深い興味，無感心。感動の中には，一時的単なるレジャーに終る者もあるが，大半は何らかの形で教養の一部となるだろう，特に成人の場合，自己の教養の内に憩い，親しみ。子供や知人に見せたい，知らせたいと言う形で現われる。結果として大衆の社会的評価として反映する。専問家による評価も大きいが，この場合はバックに有る資料，業績が対象となる。

又，極く限られた処で，青少年の基礎教育の場ともなる。このことは何も系統立った教育理論を言うのではない。博物館の利用から必然的に発生する学校教育とは異った自主的な学習の切っ掛けの場となる。

多くの成人に対しては，生涯教育の場として余暇の利用に有効に働き教養を得る場となるであろうが，これを機に生涯の目標となることは先ず少ないだろう。しかし，

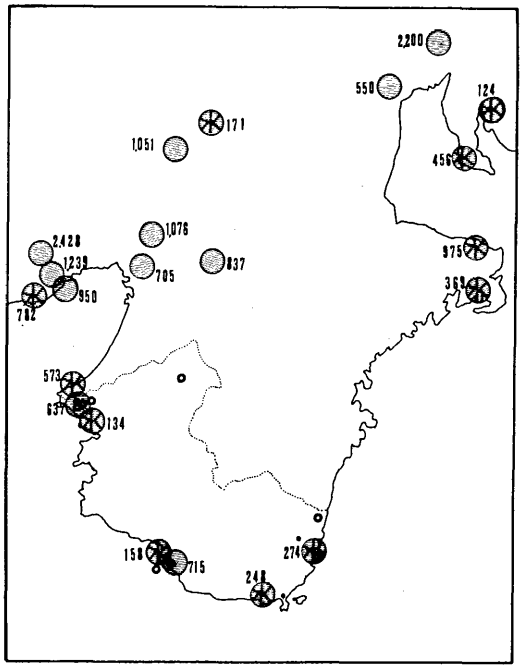
第1表　博物館の利用


博物館利用の切っ掛け
大衆
集団
団体―遠足、学習（学校）
レクリエーション（一般）
レジャー
余暇
友人
家族
個人―学習
レクリエーション
レジャー
一見（通りすがり）
趣味（個人的なもの）
旅行業者の介在
（民営では運営を左右する）
リベート
商品価格
専門家・大学・研究所
専門的評価
広報　報導
どんなところだろう
何があるだろう
博物館ができた
大衆の社会的評価
総合施設
利用の便利さ
博物館
展示（充実）
資料
業績
孤立化
単独施設
助言
無感心
博物館の存在の意義
感動
一時的感動
教育の有無
子供、知人に見せたい
自己への取り込み（生活）
親しみ
慰い
単なるレジャー
深い興味―学習・研究
専門家との出合い
専門的憧れ
教育　教養の発生
社会的教育水準の高揚
博物館の存在の意義

幼年期から青少年期には程度の程は計り知れないが，思わぬ事が生涯の目標となる可能性を秘める。著者の知人，京都大学T名誉教授は，少年期に郷里にある博物館を遊びの場とし，自然科学への興味を持ち，その道へ進まれたと聞く。著者自身も，少年期に貝類学の故，滝庸博士との出合からこの道へ進んだ。

又，著者の関係した博物館のサマースクールにおいて，学校教科では問題のある中学生，H君は，短い生涯ではあったが，著名な博士との出合を通じ，自分の職業の中に生甲斐を求めて幾つかの新種発見の機会を得，その志しは，老父への生甲斐として今も受け継がれるに至った事例がある。

博物館の展示，教育普及は，何も大上段に構えた押付けでは無く，極，普通に興味を見せる観客をいかに捕えるかは重要である。その意味において，生物の生態展示と標本展示が並列化される事により一層の利用効果が生れる。



第2図　紀伊半島周辺の動物園水族館と昭和58年度入場者の状況（単位，千人）

5. 博物館の利用

和歌山県を中心とする動物園，水族館は，図中に示す近畿，中部地区に22園館あって，関係地域の人口は，およそ27,235千人と目され，同利用率は6割強の16,652千人となり，その他の博物館利用者を含めると延利用率は10割を越えるが，一様に全人口が利用して

第2表　2館の利用動向（人数）

年度	和歌山県立　自然博物館		串本海中公園センターマリンパビリオン	
	備考	人数	オープン	人数
45			8/1 一部施設のオープン	103,094
46			9/1 マリンパビリオンオープン 和歌山国体	451,341
47			オニヒトデ大発生海中公園の活躍報導	461,419
48			↓	460,419
49				478,777
50			オイルショック 海洋博 山陽新幹線光は西へ	448,020
51			紀南地方の観光客減少	453,553
52			報導の利用	418,834
53			ワールドサファリー（白浜）オープン	386,969
54				342,228
55				310,761
56	開館広報 短期ニュース	216,120		290,761
57	7/21 オープン			273,728
58	正月開館広報	133,284	東京デズニーランドオープン	254,809
59	10月現在　特展広報	70,958		

周年広報を流す

いるわけではない。

前表に示す2館の利用者数には大きな開きが有り，又，利用目的も多く異る面もあるが，事後に受ける利用者の感情には大きな差は無いだろう。

串本海中公園では，利用者の誘致に弛まぬ努力があり，その範囲は日本全土に及び，過去2回の国際会議の共催は，その名を世界に知らせ，職員の自主的なニュースの発掘は自からの手でマスコミに広報される。

公立館である県立自然博物館は，建設時のニュース性と年数回のポスター，印刷物を通し関係機関，又は博物館の近郷に限って公報され，職員自からマスコミを通じて広報される事は無に等しくニュース性にかける。関係者には周知の施設も社会的知名度による大衆の認識が無ければ，その利用度に差が生じる場合も多々ある。

おわりに

博物館としての動物園，水族館が占める位置について，社会通念上の思考が，一般大衆は勿論，知識人のあいだでもさほど高くないことは体験的に受け止めている。このことは，余暇に対する一般的利用が，日本人的観念思考により文化的意識，価値感の認識が低いことに基因する。

その傾向として，流行有名志向が先行し，通常的な物に対する価値感が薄れ，対象物に対する価値に何を求めようとしているかに疑問をもつ。

一展示物として経済価値の高いもの，又珍種希種のたぐいも結構であるが，その本質が何であるかを博物館関係者自からが考えねばなるまい。